

女子ハンドボール競技における3次速攻とクイックスローオフの特徴

—学生レベルと世界レベルを比較して—

上田 聖菜 (201311825,ハンドボールコーチング論)

指導教員：會田 宏, 藤本 元, 山田 永子

キーワード： 3次速攻, クイックスローオフ, 試行回数

【目的】

ハンドボール競技における攻撃は、速攻と遅攻の大きく2つに分けられる。速攻は相手の防御システムが整わないうちに攻め込む方法である。2001年のルール改正によりクイックスローオフ(失点后、ボールを素早くセンターラインに持っていきスローオフを行い、相手チームが戻る前に攻撃すること)が速攻戦術として用いられるようになった。先行研究は、3次速攻とクイックスローオフが年々重要となってきたことを示しているが3次速攻とクイックスローオフの攻撃様相を明らかにした研究はこれまでに行われていない。そこで本研究では、世界レベルと学生レベルの3次速攻とクイックスローオフを比較しその違いを明らかにする。

【方法】

1. 研究対象：2016年関東学生ハンドボール女子春季リーグ戦の上位5チーム同士が対戦した7試合と2016年リオデジャネイロオリンピックの上位8チーム同士が対戦した8試合における3次速攻とクイックスローオフを研究対象とした。
2. 分析項目：対象試合における試行回数、プレー結果、シュートエリア、攻撃パターン、攻撃の開始方法(相手シュートエリア)、3次速攻における攻撃開始方法(相手のプレー結果)をレベル別、速攻の種類ごとにカウントした。

【結果と考察】

1. 3次速攻とクイックスローオフの試行回数
世界レベルと学生レベルの間に有意な関係が認められた。世界レベルはクイックスローオフが多いのに対し、学生レベルは少ないこと。学生レベルは3次速攻が多いのに対し世界レベルは少ないことが分かった。
2. 種類別に見た攻撃パターン
(1) 3次速攻：世界レベルと学生レベルで有意な差が認められた(表1)。世界レベルではパターンA(セットのポジションに進んでプレー)が71.4%と最も高く、学生レベルではパターンB(ポジションチェンジしながらプレー)が60.4%と世界レベルに比べて高かった(表2)。
(2) クイックスローオフ：世界レベルと学生レベルで

有意な差が認められた。世界レベルではパターンAが72.5%と最も多く、学生レベルではパターンBが50.1%と最も多かった。また学生レベルはパターンC(システムチェンジしながらプレー)とパターンD(ディフェンスのポジションのままプレー)が世界レベルよりも有意に多かった。

【結論】

本研究では女子ハンドボール競技における3次速攻とクイックスローオフの特徴を世界レベルと学生レベルで比較しゲーム分析を行った結果、以下の知見が得られた。①世界トップレベルのゲームでは、クイックスローオフを多く試みている傾向にある。②攻撃パターンにおいて、クイックスローオフと3次速攻いずれにおいても、世界レベルは攻撃のポジションに走り込み攻撃する傾向にあるが、学生レベルはポジションチェンジをする傾向にある。③クイックスローオフも3次速攻も学生レベルは世界レベルに比べて、最終結果で相手ボールになってしまうことが多い。

表1 3次速攻からの攻撃パターン

パターン	世界		学生	
A	60(71.4%)	*	23(24.0%)	†
B	24(28.6%)	†	58(60.4%)	*
C	0(0.0%)	†	5(5.2%)	*
D	0(0.0%)	†	10(10.4%)	*
計	84		96	

カイ2乗値=45.0 p<0.05

表2 クイックスローオフからの攻撃パターン

パターン	世界		学生	
A	50(72.5%)	*	3(21.4%)	†
B	18(26.1%)		7(50.1%)	
C	0(0.0%)	†	1(7.1%)	*
D	1(1.4%)	†	3(21.4%)	*
計	69		14	

カイ2乗値=21.5 p<0.05

*：有意に大きい †：有意に小さい